HANDS next【ハンズネクスト】
とちぎ多文化共生教育通信
発行：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センターHANDS事業
News Letter "HANDS next"
vol 29

2023年度のHANDS事業を振り返って

国際学部　立花　有希

みなさまのご協力のおかげで、今年度も数々の行事を無事に執り行うことができました。それぞれに収穫と課題が見つかりましたので、それらをこれからのHANDS事業にいかに生かしていくか考えながら、次年度を迎える準備をしているところです。

以下、今年度の事業について、「国際学部附属多文化公共圏センター年報16号」より転載する形でご報告いたします。何かお気づきのことがありましたら、ご提言いただけますと幸いです。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

（1）外国人児童生徒教育推進協議会

栃木県教育委員会および県内11市町（那須塩原市・大田原市・宇都宮市・鹿沼市・小山市・真岡市・栃木市・佐野市・足利市・壬生町・高根沢町）教育委員会とその小中学校代表、多文化公共圏センターでHANDS事業を担当するセンター員・センター研究員から構成される「外国人児童生徒教育推進協議会」は、９月と１月に開催するのが慣例であったが、今年度は10月と２月の開催とした。そのねらいは､10月の「多言語による高校進学ガイダンス」直前の開催とすることで、ガイダンスへの参加呼びかけに協力を依頼することにあった。その効果は一定程度あったと思われる一方、年２回開催の意義を最大化するには、やはり第１回を年度の前半に実施する方がよいとの反省から、来年度以降は従前の形に戻す方向で検討している。

その第１回協議会は、2023年10月３日にUUプラザで開催した。学内外30名の参加を得て、各学校の取り組みについての情報共有を中心に進行した。「教科学習の課題と工夫」についての意見交換を試みたところ、取り出し指導での教科指導に話題が集中し、在籍学級での教科学習は課題にあげられていないようであった。また、日本語指導も十分に実施し得ない状況で教科指導の余裕がないとの声も多く聞かれ、実際的な外国人児童生徒教育研究の進展の必要を痛感することとなった。

第２回協議会は、2024年２月８日に同じくUUプラザで開催予定である。

（2）学生ボランティア派遣事業

今年度は、県内の小学校４校からボランティア派遣依頼があり、うち２校にいずれも共同教育学部の学生を派遣することになった。児童の母語を話せるボランティアの希望に対しては、国際学部教員や留学生国際交流室の協力を得て、当該言語話者である留学生に個別に打診したが、

学業との両立が難しいという本人の判断から派遣には至らなかった。留学生にしても、外国ルーツの学生にしても、在学年数は限られており、加えて１年次は授業が多く、最終年次は論文提出が控えていることから、ボランティアに協力しうる年数はさらに限られている。今年度は、保護者との面談の通訳の依頼も２件あったが、いずれも応じることができておらず、HANDS事業の趣旨に照らしながら、外部との連携を含めて多言語対応の体制整備を検討する必要がある。

（３）子ども国際理解サマースクール

2023年８月３日、HANDSジュニアのメンバーを中心として、宇都宮市東生涯学習センターにて開催された「子ども国際理解サマースクール」の実施にあたった。昼食休憩をはさみ、午前・午後に２時間ずつ、SDGsについて楽しく学んだり、遊びを通して世界の文化にふれたりするイベントを学生主導で企画・運営した。昨年と同様に、学生の構想力、判断力、実行力を頼もしく、誇らしく感じる一日となった。他学部からの参加もあり、計18人の学生・院生スタッフが、細やかな気配りを見せつつ、快活な調子で小学生を楽しませようと努めていた。その甲斐あって、参加した４～６年生38名を対象とするアンケートでは回答者の97％から「楽しかった」の声を得ている。

（４）AMAUTA夏休み集団支援

2023年７月26日、８月２日、９日、16日の計４日間、真岡市のスペイン語教室AMAUTA（アマウタ）に通う小中学生の夏休み宿題支援を行った。これは真岡市国際交流協会と共同して継続的に実施してきた事業で、同協会の会報「真岡市国際交流協会ニュース」でも写真入りで毎年取り上げていただいている。学生ボランティアは延べ26名で、それぞれに、子どもと接する機会を喜び、日本語理解でつまずく児童生徒の現実を思い知り、教えることの難しさと面白さを感じ取っている様子であった。

（５）多言語による高校進学ガイダンス

2023年10月21日13時から16時まで、大学会館多目的ホールにて「多言語による高校進学ガイダンス」を開催した。事前申込制で中学１年生から３年生まで17名の生徒から参加希望があり、欠席も出たものの、当日参加を願い出る家族もあり、とても賑やかな会となった。HANDSジュニアのメンバーと通訳担当の15名の学生・院生スタッフおよび７名のセンター員・センター研究員・学外関係者で運営にあたった。近年、特定の受験校に関する具体的な質問が増えてきた印象で、相談員として対応してもらった複数の中学校教員に大いに助けられた。来日したばかりの中学３年生が日本語学校に２年間通ってからの高校進学を検討していると聞き、ガイダンス参加者への直接的な対応にとどまらず、構造的課題の改善に働きかけることも大学の使命と再認識することになった。

また、体験談発表として、2023年に国際学部を卒業し、東北大学大学院へ進学した陳泓宇さんに個人史を語ってもらった。陳さんの経験、感性、メッセージは、参加中学生だけでなく、運営側メンバーの心にも響く点が多々あった。昨年のガイダンスでも感じたところだが、この卒業生、在学生の経歴や発想の豊かさは、国際学部の魅力として、もっと広く知ってもらいたいところである。そのような機会の創出を今後も念頭におきながら、HANDS事業を展開していきたい。

（６）その他

HANDS事業としては、以上の他に、「外国人児童生徒進路状況調査」の実施、「真岡市イヤーエンドパーティ」への参加等があった。

以上が今年度の活動の概要です。その詳しい内容については、これに続けて参加学生の視点から語ってもらうことにいたします。